

Member's Forum

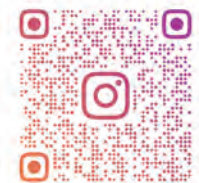
会員投稿の頁



U-35 委員会企画 9th action
「建築とみち」 活動報告
2024 年 1 月 19 日 (金)8:00 ～
1 月 20 日 (土) ～ 16:00
会場：茨木市市役所前線

企画主旨

2020 年 6 月にウォーカブル推進法（改正都市再生特別措置法）が成立し、さまざまな自治体でウォーカブル推進都市に対する政策が立てられ、試行錯誤が始まっている。今一度ウォーカブルに込められた意味を考えたい。人口減少時代における豊かな暮らしの実現を模索し、「都市」を巡る課題がますます多様で複雑化する中で、これからの「都市」はどうあるべきなんだろう、というところから議論はスタートしている。まちとの関わり代を「リ・デザイン」し、官民お互いのストックを出し合うことで都市のシビックプライドを醸成することがウォーカブルに込められた意味である。昨年 3 月に 8th action として、同じ場所で 1 回目の社会実験を行い、今回はその 2 回目である。2 回を通してテーマを「建築とみち」としたのは、建築と土木の境界を横断することと、行政管理を象徴とするみちを対象にすることで、民間と行政の相互協力によって実現できるパブリックプレスメイキング実践の 2 つの意味を掲げた。



U35 instagram



●社会へ開いた actionへ
結成 10 周年となる U-35 委員会は今年度、8th action に引き続き、9th action として茨木市と協働し、2 回目の社会実験を開催しました。社会へ開いた action の開催は、7th action の水都大阪コンソーシアムとのコラボレーションから続いており、行政や地域活動団体と一緒に練り上げていくことで、企業・団体の枠を超えて、都市空間の魅力や課題を社会に広めるきっかけとしてきました。行政とのコラボレーションでは、公共空間にアクションを起こすチャレンジとなり、地域活動団体とのコラボレーションでは、その地域で活躍される方々との接点をもつことで、より地域への愛着をもった活動へとすることができました。8th action では、継続的な活動が行える仕組みづくりとして、2×4 材と丸棒の組み合わせで構築されるラインブースユニットシステムの構築したことで、開催場所や規模に合わせて展開できる木ユニットを設計しました。23 年 10 月には、MIDOSUJI ACTION(建築と社会 2024 年 1 月号掲載) として、「生きた建築ミュージアムフェスティバル 大阪 2 0 2 3」に合わせ、8th action で設計した木ユニットを大林組・竹中工務店・日建設計・日本設計の敷地内に木ユニットを

設置しました。御堂筋沿いに面した場所に連続的に展開させ、都市の中に点在するストリートファニチャとして認識されることをねらいとしています。こうした活動を通して、都市空間にひとつ、ふたつ手を加えることで、顕在化していない空間の魅力を、地域市民と共有できることを実感してきました。活動の領域を広げる一方、活動の運営体制や今後の展開についても、回を重ねるたびに見えてきた課題もありましたが、今回の 9th action では、これまでの action の積み重ねが活かされた活動となりました。

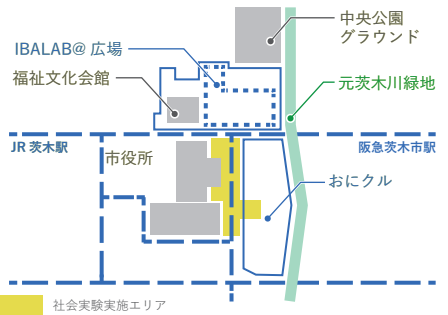


●社会実験の背景

市役所と茨木市文化・子育て複合施設「おにクル」に挟まれた市道は、廃道化計画によって、このエリアの価値を最大化する構想があります。周辺には、茨木中央公園など市民活動を支える様々な機能が集約している一方、市役所とおにクルは道路で分断され、各施設間の相互利用の妨げになっています。この「みちの在り方」を検証し、将来に向けて使い方を現時点から実験していくことで、施設だけでなくエリアの価値を高めていくことを社会実験に期待しました。

●2 回の社会実験

こうした市民の居場所としてのポテンシャルが高い市役所前線で、市のまちづくりにおける豊かな地域ネットワークを用い、既存の市民団体とコラボレーションすることで、よりよい廃道のかたちを模索していくことを、社会実験のねらいとしてきました。1 回目の社会実験では（2023.3.25 開催 8th action「建築とみち」IBARAKI STREET ACTION）では、「みちの在り方を考える」ことで道の利活用を市民に体験してもらいましたが、2 回目である今回の社会実験では、1 回目の時点では建設中だったおにクルがオープンしたことで、おにクル前の広場も含め、市役所前線のポテンシャルの高さを改めて市民に実感してもらうきっかけとなったと思います。時期をずらした 2 回の社会実験とすることで、1 回に見えた課題を吸収し、またポテンシャルとして浮かび上がった内容については、継続して価値を高めることを追求することができました。また、2 回の社会実験のそれぞれの狙いを明確にし、効果を実証することで、将来の市役所前線廃道の在り方を考えるきっかけとしました。



ー社会実験 1 回目 8th actionー

1 回目にあたる 8th action では、「道路は通行する為だけのもの」という意識を変える事に注力し、みちで過ごす体験をしてもらえる仕掛けとし、流動と滞留の二つの要素の関係を観察しました。「みちの在り方」を検証するにあって取り上げた課題に対し、車両の通行止めを行い、仮設の木ユニットを車道・歩道に跨って点在させることで、みちに新たな人と自転車の居場所を与えました。市役所前線に訪れる自転車利用者は多く、駐輪場整備が、課題の 1 つとして取り上げられ、木ユニットでエリアを計画しましたが、思ったような運用とはならず、課題として残る形となりました。また、茨木市活動団体との協力体制をつくることで、地域全体で課題に取り組むきっかけとなり、廃道が実現した時の将来像を市民の方々に経験してもらうことで、社会実験後も市民の方々が主体的に活動できる仕組みづくりとなることを期待しました。この機会で作成した木ユニットが、この後の継続的な活動へとつながりました。



通行止めのバリケード合わせた入口の看板



開催時の通行の様子



居場所をつくる木ユニット

Member's Forum

会員投稿の頁

ー社会実験 2 回目 9th actionー

2 回目となる今回は、平日・休日の 2 日間に跨いだ開催とすることで、市役所前線の平日と休日の利用者の違いを確認する目的がありました。市役所と新施設広場の分断をやわらげるデザインが求められ、道路と公園のあいだのような空間を目指すと共に、通行者の動線、駐輪場の整備をより強化した計画としました。1 回目で用いた木ユニットを再利用し、おにクルの広場との関係も含めた配置・組み方をデザインしました。継続的な課題としてあげられた駐輪場整備についても、繰り返し検討を重ねてきました。おにクルオープン後、予想以上に自転車利用が増えたため、駐輪だらけとなり、本来の目的である、みちのポテンシャルの発掘や共有が難しいのではと議論も起こりましたが、結果としては、駐輪場の分散配置と市民の居場所とバランスを上手く維持できた実験となりました。

（文責：河崎）



駐輪場としての木ユニット



開催時の通行の様子



滞留スペースの効果検証の為に設置したコタツ

Member's Forum

会員投稿の頁



●IBARAKI STREET ACTION 全体計画

南北の入口で車両通行止めを行い、市役所前線の道路占用許可を取ることで、歩道・車道に木ブースを点在させることが可能になりました。道路によって分断されている市役所とおにクルとの間の動線を作りながら木ブースを配置し、エリアごとの特色を活かしたコンテンツの配置・イベントの開催をすることで、道の新しい景観を作ることができました。また、平日と休日の 2 日間社会実験を行うことで、道空間の使われ方や、人々の行動変化を検証することができました。



木ブースに駐輪している様子



スタンプラリー景品受け渡し場所



スタンプスポットでスタンプを押す親子

●当日のタイムスケジュール

(1 日目)

6:00ー 車両通行止め開始
8:00ー IBARAKI STREET ACTION 開始
ー16:00 IBARAKI STREET ACTION 終了

(2 日目)

11:00ー IBARAKI STREET ACTION 開始
ー イベント ー
11:00ー スタンプラリー
11:00ー12:30 もちつき大会 (イベント広場)
13:00ー14:00 絵本読み聞かせ
14:15ー15:45 トークパト
「建築とモビリティ」

ー16:00 IBARAKI STREET ACTION 終了
ー17:00 車両通行止め終了

●駐輪場

市役所やおにクルへの来訪者が使用するための駐輪場を木ユニットで組み上げ、道路空間へ点在させて設置しました。木ユニットの組み方を変えることでベンチやテーブルの機能も兼ねた駐輪場としました。配置を分散させることで駐輪場としての利用だけでなく、通行者のたまり場をつくり、動線を変化させ、人の往来の変化を検証することができました。

●スタンプラリー

7th、8th action でも行ったエリアをつなぐコンテンツとしてスタンプラリーを実施しました。スタンプスポットを 4 箇所設置し、色重ねスタンプにしたことで、多くの方がスタンプの完成、そして景品の風船・みかんを求め、道空間の各エリアを回遊していました。

Member's Forum

会員投稿の頁



通りすがりに展示を見る様子



もちつきを楽しむ子供たち



椅子やこたつで休憩する大人たち



こたつに入り暖を取る子供たち



こたつで Web 会議をする様子



展示コーナー



展示パネルを見ている様子



キッチンカー

キッチンカー前の木ブースを組み立てる様子



駐輪兼ベンチになる木ブース

●インフォメーション

北側と南側の入口には、人を導き入れることに加え、人を誘導するために今回の社会実験の概要と駐輪場の配置・使い方についての案内を行いました。通りすがりに立ち止まって見てくださる方や、声をかけてくださる方が見受けられました。

●イベント広場

おにクルの芝生広場前のエリアに 1 日目はテーブルと椅子を配置し、レストスペースとしました。キッチンカーで購入した食事を堪能する方や、ヒーターの廻りで暖を取りながらお話しをする方も見受けられました。2 日目にはもちつき大会を開催し、こどもに限らず大人たちも一緒に、もちつきを体験・見学していただきました。広場にはイベント時、多くの人であふれ、賑わいが感じられました。

●こたつスペース

真冬に屋外での社会実験であったため、暖を取り、くつろぎながらイベントを楽しんでいただくため、イベント広場の隣のエリアには人工芝を敷き、こたつを並べました。1 日目(平日)はこたつに入りながら Web 会議する方が見受けられ、おにクルが蔵書している絵本を読む場所としても活用しました。2 日目(休日)にはイベント広場で行ったもちつき大会の観覧スペースとなり、配られた餅やみかんを堪能する方で大いに賑わいました。

●展示コーナー

おにクルと市役所をつなぐ動線のエリアには、U-35 の活動紹介、そして社会実験の目的を市民の方々に知っていただくため、社会実験の概要の説明や木ブースの説明、前回の 8th アクションなどの展示を行いました。

●キッチンカー

市役所南館前には、茨木市内で運営しているキッチンカーを配置しました。キッチンカーの目の前には木ブースがベンチとなった食事スペースや、ベンチを兼ねた駐輪ブースを設けることで、購入したものを座って食べられる方が多く見受けられ、木ブースの使用を促進することができました。

(文責：番匠)

Member's Forum

会員投稿の頁



Member's Forum

会員投稿の頁

■ノマドギの設計

将来廃道予定の道空間を、車中心から人中心のパブリックスペースに転換するため、8th action（建築と社会 2023 年 7 月号掲載）に引き続き、仮設の木ユニットを用いた居場所づくりを行いました。社会実験ならではの、短時間で組立・解体を行わなければならない時間的制約の中で、駐輪・展示コラム・ベンチ等、様々なコンテンツに対応するため、シンプルながらも多機能性を持った木ユニットの設計が求められました。

●配置計画

廃道した市役所前線に、歩道・車道を越境しながら木ユニットを配置し、ウォークアブルな人の居場所をデザインしました。(fig.1) おにクル・市役所利用者の駐輪スペースを十分に確保するため、南北に多くの駐輪場を配置し、三角形の駐輪ユニットをずらしながら配置することで、市役所前線の入口から見たときに、木ユニットのヴォリュームが感じられる配置としました。また、三角形の駐輪場とともに、△コラムを点在して配置することで、全体として三角形が一つの共通言語として認識されることを意図しました。それぞれのユニットは複数人で動かすことができるため、状況に合わせて細かい配置変更が可能です。また、限られた木材量の中で、各ユニット同士で部材数を調整することも可能です。

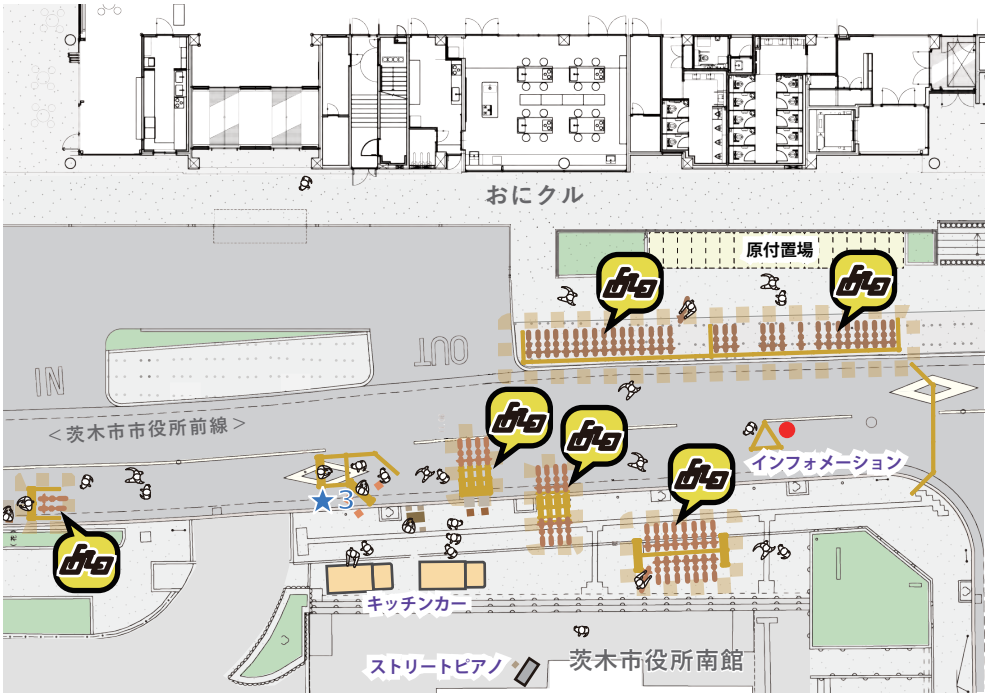


fig.1 9th action ノマドギ配置図



Member's Forum

会員投稿の頁

●「ライン・ブース」から「ノマドギ」へ
木ユニットの設計条件について、前回の 8th action から変わった主な点を下記にまとめます。

・「おにクル」のオープン

茨木市の共創の中心地となる「おにクル」がオープンしたことで、多くの世代がこの場所を訪れるようになり、特に駐輪の数が大幅に増加しました。今回の木ユニットでも駐輪ブースの設計がメインの一つとなり、新たな組立て方法も生まれました。

・部材総数の増加

前回の 8th action で使用した木材に合わせ、今回の社会実験で新たに部材を追加し、使用できる木材量が大幅に増えたことで、8th action と比べ、場所を仕切る以外の機能を持ったバリエーション豊富な木ユニットの設置が可能となりました。

・MIDOUSUJI ACTION の経験の蓄積

今回の 9th action に先立って、「MIDOUSUJI ACTION」(建築と社会 2024 年 1 月号掲載)を行いました。こちらの活動は「生きた建築ミュージアムフェスティバル大阪 2023」の開催に併せて実施され、御堂筋沿いに面する設計事務所・ゼネコンの敷地内に木ユニットを連続的に設置することで、都市の中に点在するストリートファニチャーとして、認識されることを狙いとしてしました。こうした条件の違いから、8th action では主にゾーンを仕切るための「ライン・ブース」として利用していたものを、9th action では、より意味を拡張させた「ノマドギ」へと展開させていきました。



オープンした「おにクル」と「ノマドギ」がつくる風景



廃道した道に点在させた様々な木ユニット

●ノマディックなディテール

「ノマドギ」という名称は「Nomadic= 遊牧民的な」と「木 (キ)」の造語です。Nomadic という言葉から連想される「手軽さ」や「身近さ」が今回の action を通してより鮮明なものになりました。ノマドギの特徴は次のようにまとめられます。

①材料

材料はホームセンターで調達できる身近で安価なものとしています。「2×4 材 L1820mm」と、「丸棒 40Φ L1820mm」の 2 種類のみで構成し、少人数で組立てが可能なサイズとしています。また、これらは軽トラックやワゴン車に積込むことができ、容易に運搬が可能なスケールとなっています。

②加工と寸法設定

加工はツーバイ材に 45mmΦ、丸棒に 10mmΦの 2 種類の穴あけとカットのみです。(fig. 2) 特別な加工技術は不要で、穴あけ機や電ノコにより短時間で加工が可能です。穴の配置は、ツーバイ材の断面寸法 (38×89mm) を基本モジュールとし、ツーバイ材には両端と中央に、丸棒には足元・中段・頂部にそれぞれ穴あけ加工を行っています。部材長さについても 450mm でモジュール化し、電ノコによる材の擦り切れも踏まえ、歩留まり良くカット加工を行える寸法設定にしています。この綿密な寸法設定により、単純ながらも拡張性の高さを備えています。

③シンプルな組立て

基本的な組立て方法は、丸棒に材を通して交互に重ねていくのみです。(fig. 3) 丸棒にあけた 10Φの穴にボルトを通し引っ掛かりを

作り、そこへ材を載せることで高さを調整します。ラインの最上段、ブースの最上段となるツーバイ材には鬼目ナットを仕込んで置おき、蝶ボルトをねじ込むことで丸棒にツーバイ材を押しつけ、ゆるみ留めとしています。

④組立と解体、運搬と保管

上述のようにノマドギは釘を用いないことで組立・解体が容易に行える仕組みとしています。また、運搬・保管について、材長種類別にまとめ丸棒に通し、蝶ナットで閉じれば 2-4 人で運べるコンパクトな運搬保管ユニットが完成します。

●直感性・普遍性・即興性

ノマドギは組み方によって様々な形に変容し、条件に合わせた機能を持たせることができます。(fig. 4) 各ユニットの作成にあたり、組立図を作成しました。(fig. 5) 特徴として、文章での説明はほとんどなく、すべて統一された記号で表現できます。これにより各ユニットの必要材料数から組立手順まで、誰でも瞬時に、直感的に理解できる仕様となっています。どのユニットも組立ての原理は同じのため、複数の機能を組み合わせたブースを、設置する場所の条件に合わせて組み立てることができます。

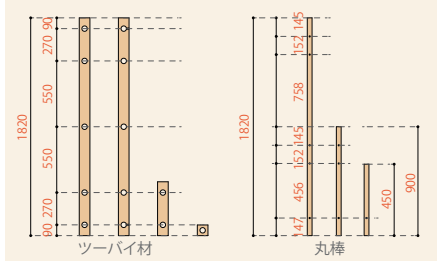


fig. 2 寸法設定

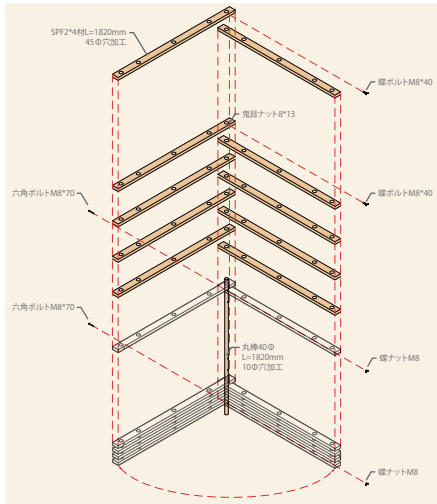


fig. 3 接合・組立のシステム

また、9th action では余った材で即興的にベンチや駐輪ブースを追加作成しました。組立て・解体が容易のため、1/1 での試行をすぐに行うことができ、今までの経験を応用して即座に新たなユニットを作成できることもノマドギの特徴の一つです。

●強軸方向の木ユニットへの挑戦

ノマドギの組立ては、重力に従って積み重ねることを基本としています。一方で、今回の action では、ツーバイ材を強軸方向に用いたユニットを新たに作成しました。ツーバイ材を三角形に組み、駐輪場としての機能を持たせており、接合部は蝶ボルトで締め付けることで強度を確保しています。強軸方向で用いることで、少ない部材で大きな立面を獲得することができます。ツーバイ材の間に車輪を挟んでとめる仕様とし、駐輪同士の間隔を箱馬 (89×90×38 のかまし材) を用いて調整することで、駐輪ラックとしての使いやす

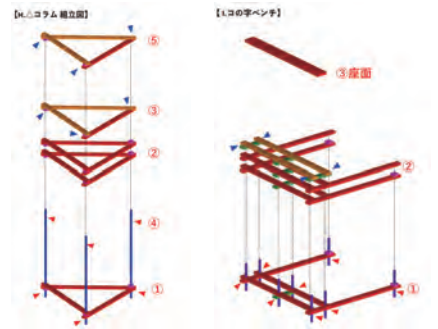


fig. 5 明確でシンプルな組立図



材を強軸方向に用いた駐輪ブース兼ベンチ



インパクトのある巨大なデン

さを考慮しました。また、450mm のツーバイ材を間に挟むことで、ベンチとして使用することも可能です。

試作段階では巨大なデンも作成し、ツーバイ材を強軸方向で用いることでインパクトのあるユニットを生み出せることがわかりました。

●ノマドギと都市空間

ノマドギはシンプルで温かみのあるデザインをしており、あらゆる既存の都市空間に溶け込むことができます。今回の action のように、ハレの空間に人々の居場所を生み出すだけでなく、ケ (日常) の空間にも、パブリックファニチャーとして使用できます。実証実験などで使われた家具が、そのまま保管庫に眠っていたり、イベント後廃棄されることがよくある中、ノマドギはパブリック空間そのものが保管庫となり、サステナブルに部材を活用することができます。資源が価値を保ったまま都市を循環し、ノマド的にそれぞれの場所

に適合しながら、新しい都市の風景が生まれることを想定しています。(fig. 6)

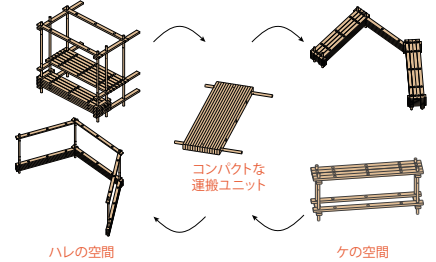


fig. 6 都市の中で循環するノマドギ

●9th action での気付きと今後の展望

前回のアクションからより多様な木ユニットが現れ、ノマドギの可能性を大きく拡張できました。一方で、部材の寸法設定や加工方法など改善の余地も見られました。ノマドギがより使いやすく、よりフレキシブルさを持って都市に浸透していくよう、改良を重ね発展させていきたいと思います。

(文責：中野)

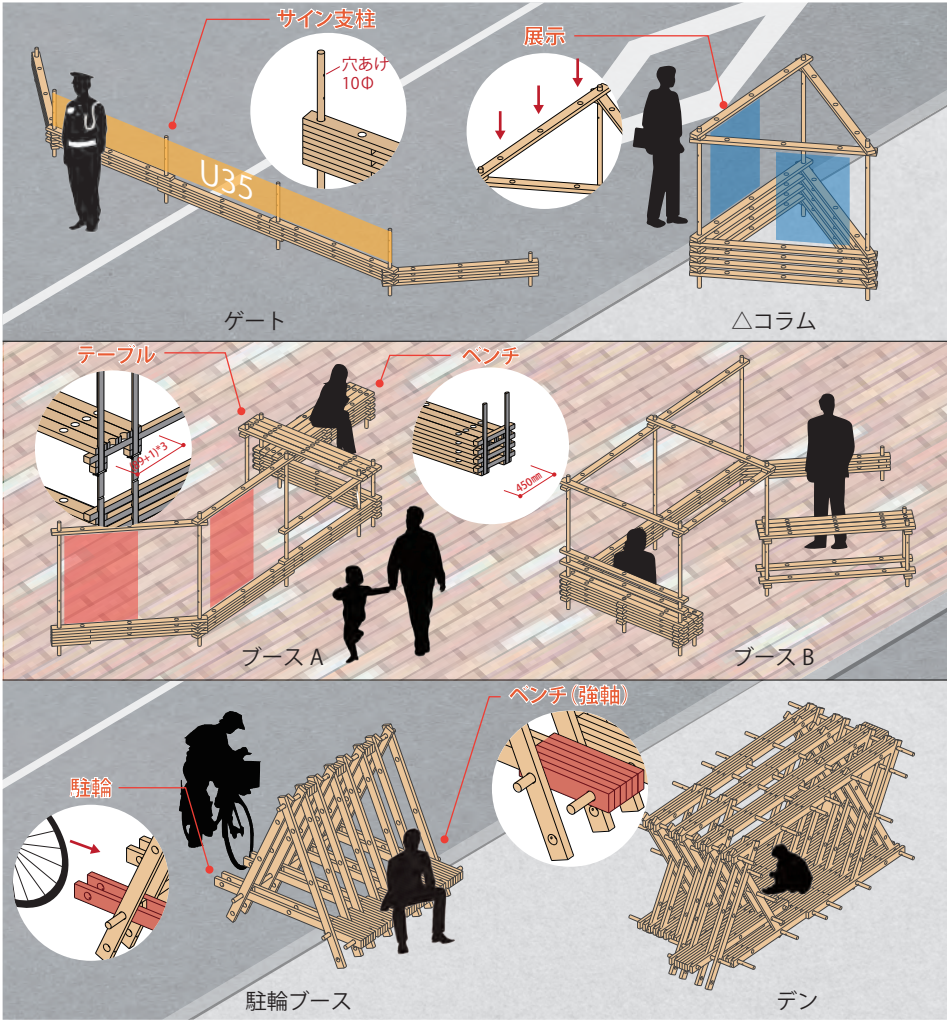


fig. 4 多様な木ユニットとディテールの特徴

Member's Forum

会員投稿の頁

■9th action の分析

昨年 3 月 25 日（土）に開催した 8th action は休日 1 日のみの開催でしたが、今回は 1 月 19（金）,20（土）日の複数日開催することができ、平日・休日の人流の変化を確認することができました。

市役所前線北側と南側入り口での流入人数計測、アンケート調査、2 ヲ所からの定点観測タイムラプス映像により、数値データによる定量的な分析及び映像、アンケートを基にした定性的な分析を行いました。

●「おにクル」の完成

昨年秋に文化・子育て複合施設「おにクル」がオープンし、市役所前線は新たに芝生広場、「おにクル」に面することとなり、従前の市役所へのアクセス道路・南北通過動線としての役割から、より広場的な性格を持つ道へとなっています。全体の来場者数としても、平日 2358 人、休日 2792 人と何れも前回の 2197 人を上回る結果となりました。

●駐輪場の整備

社会実験当日は安全性を考慮し自転車・原動機付自転車利用者は降りて通行をお願いしましたが、当日は南北出入口において非常に多くの自転車の通過交通が見られました。自転

車の交通量が多い茨木市において、いかに通過交通と広場の関係性をデザインするかは大事な要素となってきます。今回は南北出入口付近に台数を確保できる駐輪ブースを配置し、おにクル・市役所利用者はそこから各目的施設にアクセスする配置計画としました。

①出入口への駐輪場の集約

②通行動線の確保

③中心部にイベントスペースを配置

上記①～③の配置計画により、出入口で自転車を降りた人が施設に向かうまでの動線の中でイベントやコンテンツに参加している様子が見られ今回の配置により滞留と通過を整理する一定の効果が見られました。

●社会実験の特徴

周辺施設の性格上、親子連れ・若年層の来場が多く見られました。こたつエリアや餅つき、スタンプラリーなど子供向けのイベント・コンテンツを開催したこともあり社会実験期間を通して賑わいを感じることができました。こども達のにぎわいが周辺に伝搬しさらに多くの人が来場する良い雰囲気生まれていました。

また、19 日（金）の平日は休日に対して賑わいの減少を懸念しておりましたが、市役所の

利用者や職員の方などコンスタントな賑わいがあり改めて市役所前線のポテンシャルを感じられる結果となりました。



fig2. 駐輪場と中央の賑わい



fig3. 平日の様子



fig4. 十分な通過動線の確保

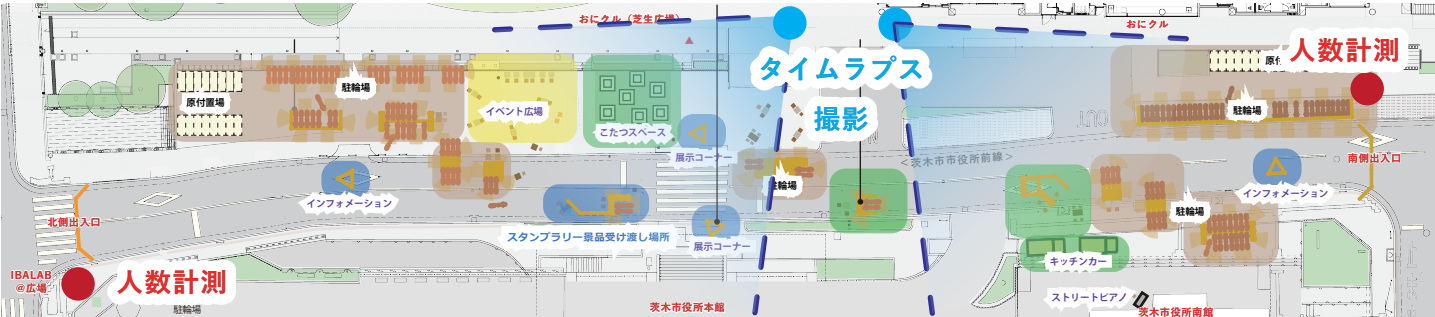


fig1. 十分な通過動線の確保

■アクティビティ調査

市役所前線への流入人数の計測、アンケート調査を行い来場者の人数・目的・世代など定性的な分析を行い、それらを基にブース・コンテンツとの関連性について考察を行います。

●流入人数の計測

社会実験の間、市役所前線の北側と南側の入り口にて流入人数の計測を行いました。分析対象としては、市役所との相互利用が確認できる平日（19 日）と休日（20 日）の 10 時～16 時にかけて徒歩、自転車、原付自転車をカウントし、今回の社会実験で展開している

コンテンツ（駐輪ブース、こたつ、キッチンカー、展示ブース等）がこの場所を訪れた人のふるまいに対してどういった効果があったかに着目しました。下記 2 つのニーズについて分析を行いました。

①市役所前線通行者のニーズ

まず、通過目的としての利用者も含めた、市役所前線の利活用度やニーズを明らかにする目的で、市役所前線北側・南側双方から入ってきた人のうち、市役所前線で滞留行為があった人の割合と滞留内容を調査しました。（fig.5）

平日の一日を通して、北側から 1133 人、南側から 1225 人の計 2358 人（2 日目は 2792 人）が市役所前線のエリアを訪れました。そのうち、立ち話をする（304 人（12.9%））、こたつに入る（117 人（5.0%））、椅子に座る（122 人（5.2%））、キッチンカーに並ぶ（216 人（9.2%））、展示を見る（315 人（13.4%））といった滞留行為が見られ、市役所前線を訪れた人のうち約半数（45.5%）の人が何かしらのアクションを起こした結果になりました。このことからおにクルや市役所目的で訪れた人のみならず、通過目的でたまたま訪れた人

に対しても滞留行為を促す効果が見られたことが分かりました。

②市役所利用者のニーズ

次に、市役所利用者の市役所前線の利活用度やニーズを明らかにする目的で、市役所から出てきた人のうち、市役所前線で滞留行為があった人の割合と滞留内容を調査しました。市役所から出てきた人は一日を通して 2073 人おり、キッチンカーに並ぶ（85 人（4.1%））、立ち話（60 人（2.9%））、展示を見る（36 人（1.8%））、椅子に座る（22 人（1.1%））、こたつに入る（12 人（0.6%））といった滞留行為が見られました。市役所から出てきたあとの動きとしては、そのままエリア外へと出ていく人、おにクルに向かう人が大半でしたが、市役所の利用者や職員の方々に対しても一定の滞留行為を促す効果があることが分かりました。こたつは利用者の割合こそ少ないですが、一人当たりの滞在時間が長くイベント中終始誰かが利用している状況でした。一番行為として多かった立ち話については、こたつやストープのまわりに滞留して話している人が多く、一つのコンテンツを媒介としてその周りに自然と人が集う場所として機能するなど、人の振る舞いの拠り所となる効果があることが分かりました。

●アンケート

アンケートによると、来訪者の年齢は全体として各年代がほぼ同じ割合となっており、世代が偏ることなく、多様な年齢層の人が訪れていました。また来訪者の多くが、沿道で勤務している人（16.1%）や買い物や散歩等で利用している人（19.4）、おにクル目的で来た人（6.5%）であり、来訪の目的を尋ねたところ、このイベントのために訪れた人（38.7%）の他、約半数（市役所目的（12.9%）、おにクル目的

（22.6%）、通りがかり（16.1%））がイベントを知らずにたまたま訪れた人でした。（fig.6）このことから、地域住民が普段から利用する場所として市役所前線のポテンシャルを感じる結果となりました。その他、アンケート結果では一番印象に残ったコンテンツが青空こたつであるという結果が出ており（64.5%）、路上にこたつという通常ではありえないコンテンツがもたらす非日常感・目新しさにより印象に残ったと回答している人が多くいました。

こういった、地域の方々の今回のような目新しい試みや通行止めに対する理解の素地や適応力が、市役所前線ひいては茨木市全体のポテンシャルの裏付けになっていると感じます。■コンテンツと人の流れ

上記のアンケート結果より、イベントを目的として来訪した人に限らず、おにクルや市役所、通過目的でたまたま訪れた人に対しても滞留行為を促す効果があることが分かりました。そこで、どの要素が人流に影響を与えているのか、本イベントで設けたコンテンツを「駐輪型」「情報発信型」「滞在型」「イベント型」の 4 タイプに分類し、定点観測の映像をもとに分析しました。（fig.7）【駐輪型（駐輪場・原付置場）】おにクルや市役所、郵便局に自転車で来る人がとても多く、

駐輪のために短時間滞留する人が多かったです。どの時間帯も通過・滞留が多い印象でしたが、特に正午以降に人の動きが多くなりました。【情報発信型（展示・インフォメーション・スタンプラリー・景品受渡し場所）】興味のある人が訪れては離れていく単純な動きが見られました。求心的な集まり方は見られず、どの時間帯もまばらに短時間の滞留がありました。

【滞在型（ベンチ・キッチンカー・こたつ）】コンテンツの中で最も滞在時間が長く、こたつやキッチンカーといった魅力的な要素もあり求心的な人の動きがみられました。気温が低く雨が降る時間帯もあったため滞留が見られた時間に偏りがありましたが、正午は両日とも多くの人の滞留が見られました。

【イベント型：イベント広場が該当】イベント時に瞬間的に多くの人が集まりました。イベント自体の求心力が強く、遠くからでも眺める人の動きがありました。

場所が持つポテンシャルもあり、多くの方々にコンテンツを利用していただけました。廃道化に加えコンテンツの特性により新しい人の流れを作り出すことで、広場的な使われ方について課題と指標を得られたと感じています。（文責：山岡・田田・大西）

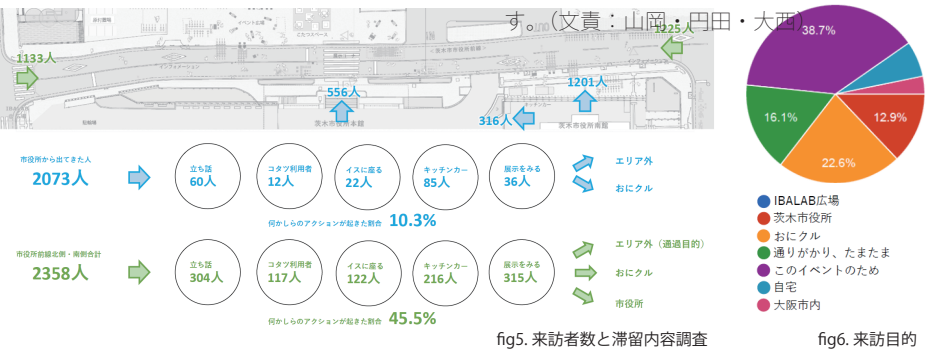


fig5. 来訪者数と滞留内容調査

fig6. 来訪目的

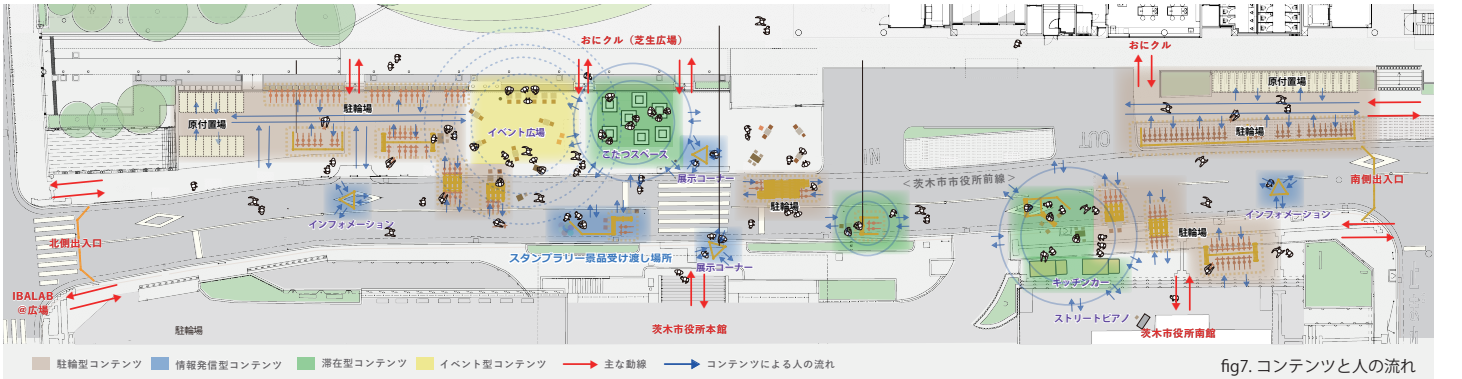


fig7. コンテンツと人の流れ

Member's Forum

会員投稿の頁

■座談会

9th action では、前回と同様に「建築とみち」をテーマにしたアクションが行われました。前回の 8th action や MIDOSUJI ACTION との比較、前回の座談会での議論を踏まえつつ、今回のアクションを振り返りました。

座談会参加メンバー:河崎、倉知、市川、水野、平岡、洲脇、大屋、吉田、番匠、中野

●みんなで感想を共有しよう

水野：平日と休日の2日間にわたる社会実験を行えたことは活動は、一つの重要な成果と言えます。この成果が生まれた背景には、茨木市役所協力やU-35の熱意、そして市川さんの継続的な協議がありました。これらの要素が結びつき、我々が達成した結果です。また、前回の社会実験のフィードバックを受け、今回は通行止めに対する違和感が前回よりも少なくなったと感じています。たとえ2回の社会実験であったとしても、市民の意識が変わりつつある実感があり、これは大きな成功と捉えています。一方で、駐輪場の分散配置の効果に関しては、検証が難しい側面もありました。1回目の社会実験では駐輪場文さん配置への理解が難しいと感じましたが、2回目では改善されて分かりやすくなりました。しかし、結果的には駐輪場自体に焦点が当たり、分散配置の効果が明確ではなかったと認識しています。今後はこの点に対して改善策を模索していければいいと思います。

市川：印象的だったのは、たたらば珈琲さんからU-35のメンバーに対して、褒め言葉的な発言として「なぜここまで頑張れるのか」という意見を頂いたことでした。一般市民の意見とたたらば珈琲さんとの意見の違いは、たたらば珈琲さんが実際に行動を起こしている側の立場であり、私たちが行っているを非営利目的の活動の大変さを理解しているという点にあります。たたらば珈琲さんの視点から見れば、商業的な利益を追求していないにもかかわらず、真剣にこの活動に取り組んでいる姿勢に感動し称賛の言葉が述べられたことが印象的でした。

大屋：社会実験の大きな目的として将来像を共有することが挙げられ、2回の社会実験



座談会の様子

で市民に対してこれまでの成果や可能性を共有できたことは良かったです。これをU-35の成果としてうまく表現することができないのか、また、そうした成果を表現できる場があるのであれば、それに向けた仕込みが必要だと思います。

平岡：2回の実験を達成できたことには満足しています。今回もゼロから始め、木ユニット（ノマドギ）などを作り上げました。初回は完成が難しく不安も多く感じましたが、2回目では作業がスムーズで、完成度が高まっていると感じ、この進化している様子が良かったと思います。実際に使っていく中で、市民も利用方法に慣れていく将来も感じる事ができました。何度も試行錯誤し、積み重ねていくことが重要だと改めて感じました。

洲脇：前回よりも滞在時間が増え、道自体を居場所として活用してくれる人が増加しました。これには単純におにクルができたことも一因ですが、餅つきなどのイベントを通じて、参加者が列を作りその場で食べるといったプロセスがあったことが挙げられます。このようなコンテンツは、参加者に滞在してもらうきっかけを提供できたように思います。

●ノマドギの課題と可能性

中野：ノマドギは8th action、MIDOSUJI ACTION、9th actionといった様々な場所や状況で展開されましたが、それぞれ異なる印象を受けつつも、どの風景にも馴染む特性を持っているように感じました。この特徴は、ノマドギがシンプルな構成かつディテールに配慮されていることに起因しているように思えます。一方で、高さ調整のために取り入れた箱馬に頼りすぎたデザインについては、改善の余地があると感じています。

倉知：これまでのノマドギの形状は主に重力で成立していましたが、新たに追加した形状は形そのもので成立する構造を持っています。この変化が、以前よりも箱馬での補強が必要とされる状況を生み出しています。この点において、メンテナンスの面や運搬ユニットも考慮しつつ、寸法調整を行いたいと考えています。現行のサイズでは、運搬時に車両の寸法に適合しづらい課題があります。この問題に対処するために、運搬車両への運び込み方法や運搬時の寸法体系などを考慮し、材のバリエーションの調整などを通じて整理していきたいです。

「どこにでも馴染んでいた」という特性は、様々な場所で引き立て役となることを目指す上で魅力的に感じました。この特性があれば、多様な環境に適応し、新しい形やコンセプトにも柔軟に対応できると考えます。どこにでも馴染むことは、肯定的な側面としても、否定的な側面としても捉えられるでしょう。一方で、様々な場所を引き立てる形やコンセプトを追求することで、ますます需要が拡大していく可能性があると感じました。



箱馬を噛ますことで部材間隔を調整するユニット



運搬時には丸棒に部材を集約させる

Member's Forum

会員投稿の頁

●人の記憶から形を考える

中野：試作段階で作成したスライドするユニットのアイディアは、小学生が作ったスライドする本棚から派生しました。身体的な経験は強烈な記憶として残り、それが一般の人々がノマドギを使用する際にも記憶に残りやすいという発想です。この発想から、ノマドギが一般の人々に広く受け入れられ、利用されると、モノと人々との記憶が都市全体で結びつく都市像が形成されると感じました。

洲脇：身体的な経験や記憶は重要な視点だと感じました。特に子供から大人までが共通する知識や常識を基にすることは、受け入れやすさや利用のしやすさを確保する上で重要です。このような共通の基盤を築くことで、ノマドギが幅広い層に親しまれる可能性が高まるように思います。

市川：「駐輪場はこういうところ」「カラーコーンに仕切られて場所は入ってはいけないところ」などと、一般的な常識が既に浸透しているため、駐輪場ブースなど通常のデザインから外れた斬新なものを導入すると、それが自転車置き場として適切に理解されない問題が生じます。逆に、知識が制約を知らないこどものように、規則に無知であれば自由に利用することができる可能性もあります。この矛盾をどう解消するかがテーマとなるように思います。

●ノマドギを認知させていく手段

洲脇：駐輪場ユニットに追加されたベンチの機能について、設計した私たちはベンチとしての意図を理解していますが、市民の側ではベンチとして認識しにくい状況が生じていました。また、ベンチのように見えるが座って良いのかどうかの判断が難しいと感じられました。



駐輪場に付加したベンチ機能を使うU-35のメンバー

大屋：短期的なイベントで実験を行う場合、利用者に対してユニットの使い方を理解し、意図した通りに利用してもらうことは課題が多かったです。しかし、長期的なイベントであれば、時間をかけて徐々に理解が進み、ユニットが期待通りに使われる可能性も考えられます。

水野：actionの前に、仮設的に作成された駐輪場をノマドギに置き換え、action当日までそのノマドギを駐輪場として使用しました。この駐輪場の変化は、一般の方が理解できる範囲での絶妙な変更であったという印象でした。ノマドギで構築された駐輪場は、一般的な駐輪場の雰囲気を備えつつ、カラーコーンの役割も果たしていました。木材を配置しただけではありませんでしたが、市民はそれをカラーコーンとして認識してくれました。このような段階的な変化は市民が変化を理解し、徐々に受け入れていくプロセスであるように思えます。

市川：最初は駐輪場にカラーコーンを設置し、その後ある日ノマドギに切り替わった状況でした。一度、違和感のない形を作り、使い方を慣れさせてから、その後にノマドギに置き換えるという手法も考えられます。

actionまでの議論では、ノマドギが一日の中でどのように変化するかという可変性を取り上げられていましたが、同様のアイデアが季節などの時間軸でも展開できるかもしれません。たとえば、冬季は駐輪場として機能している場所が春先になるとベンチに変わるなど季節や状況によって変化するノマドギの可能性を模索することで、利用者にとって新鮮で興味深い体験が生まれるかもしれません。

●都市の不確定さを見込んだデザイン

吉田：周辺環境やコンテンツとの関係性を考慮しつつ、実際の場所の特性や人の動きに合わせて駐輪ブースを配置しました。しかし、予想以上の自転車の台数から、三角形の駐輪ブースの間にも駐輪スペースができていたという状況が興味深い結果でした。

番匠：予期していなかった事象として、社会実験当日に風が強く、ブースに括り付けていた風船同士が絡まって取れなくなるという状況も発生しました。

倉知：自分の中のテーマであった、市民の人たちに「都市の新しい面白さを発見してもらう・知ってもらう」という視点で考えると、駐輪場の予期せぬ使われ方や風船の事象は都市独特の偶発的な出来事と捉えられます。都市は不確定性を前提としており、偶発的な出来事を誘発し、それに柔軟に対応する能力を持っています。このような不確定性を前提としたプランニングをあらかじめ行い、偶発性を盛り込むことで、建築にはない要素を引き出すことができると感じます。

建築が機能や活動を予め想定し土地に固定的な性質を持つのに対し、都市は不確定性を許容し、柔軟に変化に対応します。偶発性を取り入れたプランは、都市の面白さを可視化し、建築にはない可能性を提示する手段となりえると思いました。都市の自然環境が多様で不確定性が高い中で、このような活動が建築の可変性にアプローチできると考えられ、得た知見を通じて建築・都市において重要な役割を果たせると感じます。



U-35 が想定していた駐輪ユニットの使われ方



意図せずユニット同士の間に駐輪された自転車

●ノマドギのスケール感と今後の展開

倉知：ノマドギの適正な規模感についての理解が進む中で、今回の試みではまだ間延びしている印象を受けました。もう少し粗密にメリハリをつけることで、より効果的な配置が可能かもしれません。初めは道路全体の面積に対してアイレベルでブースが多く見えるように、平面的に千鳥に配置していましたが

Member's Forum

会員投稿の頁

、実際の結果としては空を含めた空間としてはブースが少ない印象がしました。これを踏まえて、室内で大胆に展開するなど、空間に対してギャップのある設置方法を採用すると、より印象的な空間が創り出せる可能性があるように思えました。

市川：今回のActionでは、MIDOSUJI ACTIONでの屋内展示のディテールを屋外でも検討しました。その結果、屋内と屋外では環境が異なり、設置方法も変わってくると認識しました。ノマドギのシステムを展開する上で、最終的にはイベントを行いたい人たちが自ら作成できるような状況を目指せるといいと思いました。具体的には、我々がシステムと部材を提供し、イベントを主催する人たちがそれを利用して自分たちのアイデアを具現化できるように仕組みが構築されると面白いだろうと思っています。



アイレベルで千鳥に配置されたノマドギ

●市役所前線における駐輪場の配置

市川：市役所を利用する人とおにクルを利用する人で駐輪場に停める時間に大きな違いがあることが分かりました。市役所を利用する人は30-40分で駐輪場に戻ってくる一方、おにクルを利用する人は平均2-3時間停めている人がいるとのこと。南館の前では回転率が高く稼働している一方で、他の場所では駐輪場がたまっていく一方の状況があり、これが大きな違いだと感じました。

大屋：家具の配置はちょうどいい規模感でしたが、駐輪場は予想以上に混雑していました。自転車が想定以上に多く集まり、北と南から中央に向かって攻めてくるという状況でした。分散配置と言いつつも、当日の状況を踏まえながらの可変させていく配置に可能性があるのかもしれません。

市川：解決するための一つの手段として、市役所前の駐輪場に対して1時間以上は有料

などの制度を導入することが考えられます。

逆に、おにクルの屋内駐輪場は無料とし、場所によって利用料を変える方法も検討できます。現在無料であることから不満がでた場合でも、おにクルなどの利用者には駐輪券を発行するなどの手続きを導入することで、利用者が手間を惜しまずに屋内駐輪場を利用する一方で、それでも良いと考える利用者は市役所前の駐輪場を選択するなど、柔軟な対応が可能です。

倉知：駐輪場の管理に関する話では、有料・無料や利用者の目的に応じて駐輪場を設けるゾーニングは重要ですが、将来的には広場としての利用のことも考慮が必要です。駐輪場の制御を強化しすぎると、広場の自由な利用が難しくなり、バランスを取ることが課題となります。駐輪場を快適に利用しつつ、同時に広場としても魅力的に活用できる計画を構築することが今後の目標と考えられます。



市役所を利用する駐輪場は回転が早い



おにクルを利用する駐輪場は回転が遅い

●コンテンツがもたらす効果

水野：こたつは最初は入ってくれる人が少ない印象でしたが、1人や2人が入ると、他の人もつられて入ってくる状況がありました。前回の絵本コーナーでも同様の状況が見られました。誰かが利用すると、その場所がその使い方をするための場所であるという認識が広がっていくことを再認識しました。今回は季節的な理由からベンチなどの利用が少なかつたものの、春先の季節などには新しい使い方

やベンチとしての利用が増える可能性もあると感じました。

大屋：イベントとしては、真冬に行くことに対して不安もありました。社会実験当日はそれほど寒くなかったこともありましたが、ストーブやコタツがあったことで外にいる人が多かったです。将来的にストーブを置くという提案もありましたが、期待していたほどの効果は得られなかったと感じました。

洲脇：実際にコタツを使用した市民の中には、「こういう視線で見ることはないから面白い」と述べる人もいました。子供の頃は芝生で駆け回って寝転がることもあるけれど、大人になるとそういった目線で物事を見ることが減っていきます。低い視線レベルでのノマドギのラインなどは設定されていましたが、都市の中で新たな視線を取り入れることが、新しい発想や視点を生み出し、街の魅力を向上させる可能性も考えられるのではないのでしょうか。



こたつを利用する茨木市民



路上に設置したストーブ

●市役所前線のあり方

大屋：市役所前線の空間が最終的にどうなるべきか。人通りも多く、駐輪場の需要も高い。人々のための空間であると同時に、駐輪場のスペースも確保しなければならない課題があります。さらに、少し滞在できるスペースも考慮されています。これが将来の理想像なのでしょう。

市川：「平日と休日の利用者動向が異なるだろう」という仮説に対する実際の結果を見

ると、予想に反して違いがあまり見られないことが明らかになりました。休日におにクルの利用者が増加し、平日には市役所の利用者が増えるものの、駐輪場のオンオフがあまり感じられません。この結果から、想定されていた駐輪場用途の切り替わりではなく、代わりに人流がカギになっていることが分かっています。平日と休日の人の動きの違いも観察され、平日はおにクルと市役所の行き来が主で東西方向に、休日は南北方向に動く傾向があります。このような異なる人流の中で、人が自然に集まりやすいエリアや、1人で歩いている人がくつろげる場所をデザインすることがテーマになりつつあります。イベントエリアにおける10~20人の集団形成に加えて、2~3人や1人で歩く人々が快適に滞在できるような工夫が求められており、これら小規模な集まりに適した場所のデザインが課題となってるように思います。

大屋：餅つきのイベントでは道での餅つきが行われ、人だかりが形成されましたが、同じタイミングでおにクルの広場は巨大な空きスペースとして閑散としていたことが印象的でした。この状況には不思議な感触があり、おそらくおにクルがメインの空間として存在し、市役所前線がそのサブ的な補完的な空間として機能するべきであったのではないかと感じます。



おにクルの広場と市役所前線の様子



餅つきに参加する親子

■設計者が行う社会実験の意義

市川：社会実験を実施する企業は存在しますが、U-35が他社と異なるのは、家具を持参し芝生を敷いただけでなく、空間そのものを創造していることです。U-35は単なる社会実験の提供者ではなく、その場所に適した形を考え、市民が参加しやすい体験的で魅力的な仕掛けを作り出しています。このアプローチによって、U-35の社会実験は独自の意義を持っていると考えられます。

倉知：行動を起こすだけでなく、資金が限られている中で物事を実現するという矛盾に直面しながらも、それが設計者としての重要な役割であると認識しています。モノを具現化し、それが社会実験の象徴となることが重要であり、絵や形が具現化されることで価値が生まれていると考えています。

●U-35のこれからの活動

倉知：子供の視点で都市を見る新鮮さに気づいてくれた市民がいたことは興味深い経験でした。このような発見を増やすためには、子供が見つけたできごとをサポートする取り組みが不可欠です。子供の発見が大人たちにも共有され、都市の小さな面白さが広がるような状況が生まれれば、都市全体の魅力をより引き立てることができるのではないのでしょうか。

河崎：茨木市でのアクションとMIDOSUJI

ACTIONを通して、これまでの活動にはなか



ステージに寝転がる子供



駐輪場横のスペースに腰掛ける子供

った社会との関わりを強く感じる事ができました。我々は社会に開くような活動をし始めて2-3年でしかありませんが、U-35として10周年を迎え、「建築と〇〇」というテーマに焦点を当てながら、最近では公共や社会性のテーマにも取り組んでいます。そのため、今回のような活動を通して外部との対話の機会を増やしていくことが良い方向だと感じました。

洲脇：物や作られた空間が自体が広告となり、これがU-35などの認知を得る重要な要素となりうると感じます。活動を具体的に物や空間として表現できるようになることで、アピールや発信が明確になり、それが出版などのメディアを通じて伝えやすくなるでしょう。また、次の年度だけでなく、数年後の目標や方向性を設定することで、より具体的な展望が得られるのではないのでしょうか。

倉知：自分たちの10年間の活動と将来の展望を明らかにするために、展覧会を企画することが考えられます。これを通じて、各年度の活動や社会的なインパクトを10年の時間軸で振り返り、今後の方針や目標を検討することがテーマの一環となります。同時に、最近では発信できる内容が増えてきたことを踏まえ、これらの情報を効果的にまとめ上げ、展示することで、活動の全体像や成果を視覚的に提示する1年になるでしょう。

●9th actionを終えて

今回は前回に引き続き茨木市市役所前線に置いて平日・休日の2日間、社会実験を企画し道空間の利活用の可能性を前回前回以上に市民の皆様に実感いただける機会になったのではないのでしょうか。最後に、ご来場いただきました皆様、茨木市役所様、53kitchen様、たたらば珈琲様、Y's Crepe様、ゲキダンイイノ様、立命館大学様、竹中工務店様、茨木市立中央図書館様、カメラマン小野田亜紀様、ご協賛いただきましたメーカー様、ご協力頂いたすべての皆様に深く感謝申し上げます。



U-35 Instagram

当日の様子や写真、動画に加え、過去の活動内容もアップしております。



U-35委員会 HP